

Title	友利元島遺跡が証す明和大津波
Author(s)	盛本, 勲
Citation	論文集「防災と環境」(1): 31-32
Issue Date	2012-08
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12001/20011">http://hdl.handle.net/20.500.12001/20011</a>
Rights	沖縄防災環境学会

# 友利元島遺跡が証す明和大津波

盛本 勲(沖縄県教育庁文化財課)

## 1. はじめに

宮古島東南部に位置する友利元島遺跡(近世)で、所謂「明和大津波」を発掘調査によって、考古学的に実証した報告を行う。

なお、発掘調査時点(1987年)で、宮古・八重山で「明和大津波」を考古学的に証した事例は初めてであった。

## 2. 発掘調査の概要

- ・遺跡の所在地：宮古島市城辺字友利
- ・遺跡一帯の標高：9～10m(遺物包含層及び遺構検出面は8.5～8.7m)
- ・調査の契機：個人住宅建設  
※1995年4月～8月に、県道友利線201号拡幅工事に伴い、城辺町教育委員会によって発掘調査を実施(下地編2004)
- ・調査年月日  
1987年8月下旬～10月
- ・調査面積 約200㎡  
※県道拡幅工事に伴った発掘面積は1800㎡(下地編2004)

## 3. 遺跡の堆積層序

地山まで含めて、4枚の堆積層から成る。城辺町教育委員会が実施した県道拡幅工事に伴った発掘調査においても基本的には、同様な堆積状況を示している(下地編2004)。

I層＝表土・耕作土

II層＝無遺物層。砂層に礫や枝サンゴ等を含む。本来は白砂層であったと思われるが、上層からの染み込みで、淡黄白色を呈す。

III層＝遺物包含層。土器や陶磁器等、多くの遺物を含む。出土遺物からして、時期は近世主体。

石敷や石列等の遺構が検出

IV層＝地山。茶褐色を呈した砂混じりの土層

## 4. 検出された遺構

- ・石敷遺構 2基
- 石敷・1  
調査地の中央部付近で検出。  
1.6～1.8m幅で南北に延びる。西側では縁

石と見られる50～60cm×30cm程の大型のサンゴ礫を列状に配置し、その内側には拳大の礫を敷き詰める。

石敷き・2や石列遺構等との位置関係からして、ムラ内の小路(道)?

### 石敷・2

調査地の西北隅で、コーナー部分のみを検出。全容については不明。

ほぼ全面に20×25cm大の板状石を敷き、隙間に小礫を詰めて丹念に仕上げる。南端ラインの途中で石が配置されていない箇所があるが、その部分ではマウンド状をなして灰層が検出された。

建物の基礎としての性格を有したもの?

### ・石列遺構 1基

調査区西端の中央部付近で、一部のみを検出。全容については不明。

20～25cm大の礫をコ字状に配置し、南東隅には厚手の略円形の石を載せている。規模は南北1.45m、東西(1.9m+α)。

本来、長形状をなし、石列は建物の基礎部にあたり、南東隅の略円形の石は礎石であったであろう。

## 5. 出土遺物

- ・土器  
所謂、宮古式土器(下地和宏分類のII類)がほとんどである。器形は壺形が圧倒的主体。希に鉢形、甕形も含まれる。
- ・中国産陶磁器  
青磁・白磁・染付(青花)、褐釉陶器がある。青磁＝雷文帯碗や同時期の無文碗、盤など、15C代に属するものを若干含む他は、16C代に属するものが殆んど  
白磁＝青磁とほぼ同様  
染付(青花)＝概ね16～17C代に属するものが殆んど  
褐釉陶器＝青磁・白磁と同時期
- ・沖縄産陶器  
施釉陶器＝所謂、湧田焼や古我地焼、あるいは初期壺屋焼にみられる灰釉碗が主体

無釉焼締＝播鉢類を主体に、甕、壺等があるが量的には少ない。

- ・古銭  
1点のみ出土。錆ぶくれがひどく、文字の判読が不可能
- ・鉄片  
古銭と同様、錆ぶくれがひどく、原形は不明
- ・骨製品

牛？の脛骨を利用した<sup>やじり</sup>鏃様の製品

## 5. II層・黄白色砂層の検討

特徴：人工品としての遺物は皆無＝無遺物層  
若干の自然貝を含むが、殆んどがローリングを受け、磨滅している。

いかなる現象によって堆積したか。

⇒人為・自然の両面から検討

結果：調査地点より125m程離れた海岸砂丘より何らかの作用によって打ち上げられ、III層の遺構及び遺物包含層面に被覆した自然堆積と結論

何らかの作用とは？

砂層を仔細に観察すると、その中に海蝕台などに棲息するイボタマキビガイ等の食料としては採るに足らないような微小貝が含まれていることが貝類学者の安谷屋昭氏の教示によって判明した。

これらの貝類は、その生態上、岩礫等に張り付いた状態で棲息している。そして、これらの貝は、磨滅を受けていない。ローリングを受けた貝との区別は明確である。

安谷屋氏によれば、このあり方は何らかの強い衝撃によって、瞬時に運ばれたのであろう解釈される。

強い衝撃というのは、津波等である。

同様な砂層のあり方は、調査区西側を南北に走る県道拡幅工事に伴った城辺町教委による発掘調査でも確認されている(下地編2004)。

## 6. まとめ

遺跡の時期は、若干の15～16C代の中国産陶磁器を含むものの、宮古式土器や沖縄産陶器等の主体的出土状況を考慮すると、17～18C代に下限を求める。

遺構及び包含層上面に堆積した黄白色砂層は津波等の強い衝撃によって運ばれ、被覆した。

II層・黄白色砂層の被覆した時期等を検討した結果、乾隆36年卯年・明和8年3月10日(1771年4月24日)に宮古・八重山一帯に襲来した「八重山地震津波」、所謂「明和大津波」によるものであろう、との結論に至った。

## 7. 今後の課題など

発掘調査やボーリング調査等による浸水域範囲の把握

類似遺跡における追認

砂川元島遺跡(城辺)、宮国元島遺跡(上野)、新里元島遺跡(上野)など

関連諸科学との共同調査

文献史学、地質学、地震工学、貝類学、etc

### <参考文献>

下地和宏・編、2004：友利元島遺跡-発掘調査報告書-。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

盛本 勲、1987：実証された明和大津波-友利元島遺跡-(上・中・下)。沖縄タイムス。11月4～6日 文化欄。沖縄タイムス社。那覇。

[1988：月刊文化財発掘出土情報。通巻61号。pp156～158。ジャパン通信社。東京に転載]

盛本 勲、2008：地震津波によって被覆した宮古島東南部の近世の遺跡。「沖縄考古学会2008年度研究発表会-考古学から見た環境と災害-遺跡にあらわれたメッセージ」。沖縄考古学会2008年度 研究発表会発表要旨。pp29～37。沖縄考古学会。沖縄県西原町。

盛本 勲、：《特集 地震の考古学 37》-沖縄県- 地震津波によって被覆した近世の遺跡。古代学研究。178。pp44～49。古代学研究会。大阪。